

はじめに

研究紀要の作成時期となり、久しぶりに昨年度の紀要を手に取りページをめくってみました。昨年度は、新型コロナウイルスに始まり新型コロナウイルスで終わった年であり、本会としても研究紀要を作成することぐらいしかできない1年でした。令和3年度も前年度と社会の状況に大きな変化はありませんでしたが、なんとか昨年度以上の成果を残したいというのが会員の強い思いでした。しかし、予定していた夏の研究大会も直前に新型コロナウイルス第5波のあおりを食らい延期となりました。その中でも、山口県以外の中国地方4県から実践事例を送っていただき、その取りまとめができたことはせめてもの救いでした。また参加者を限定しての会であったため大々的にアナウンスはできませんでしたが、今年度は帰国者報告会も行うことができました。帰国された2名の先生方のお話に私たちも久しぶりに刺激を受けました。延期した夏の研究大会も1月開催予定で準備を進めてきました。しかし今度は第6波の影響で急遽オンライン開催とはなりましたが、なんとか予定していた内容で行うことができました。

このように新型コロナウイルスの影響で様々な制限はあるものの、本会の活動を進めていくことで、多くを自粛していた昨年度と比べて手ごたえをつかんだ1年でもありました。特にオンラインでの活動実績を積んだことは、新たな可能性を強く感じました。国際理解を進めるには、受け身ではなく異文化に積極的に足を踏み入れ、互いを理解し共感し分かり合うことが大切です。ある意味オンラインは私の中では異文化であり、未知のオンラインに受け身の姿勢が強かったように思います。しかし、講師や参加者をオンラインでつなぎ研究大会を行う中で、このツールは国際教育に必須のものだと遅ればせながらも気付きました。居ながらにして、その時の生の情報を気軽にやり取りできるこのシステムを活かさない手はないと感じました。新型コロナウイルスの脅威はまだまだ続きそうですが、今はそうした中でもこれまで同様、いやこれまで以上の活動が展開できるのではと次年度の構想に思いを膨らませています。

昨年度以上の活動ができたとはいえ決して多くの実績を残せたわけではありませんが、本誌は会員がこれまで築いてきた実践や本会の今年の足跡を形にしたものです。手に取られた方には、本会の活動や本誌の内容を近くの誰かと何かの話題にさせていただければ幸いです。また、本会の活動をいつも支えていただいています山口県教育委員会様、山口市教育委員会様、山口県国際交流協会様、独立行政法人国際協力機構 JICA 中国様など各団体の皆様に改めてお礼申し上げます。

山口県国際教育研究会
会長 藤井 智寛
(山口市立湯田小学校 校長)